



## 一般社団法人日本母性看護学会の さらなる発展に向けて

一般社団法人日本母性看護学会 理事長 森 恵美

拝啓 初冬の候、本学会の社員の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。私は平成27年6月の総会にて、前期に引き続き本期も理事長に就任させていただきました森恵美と申します。平素より、社員の皆様、高橋真理副理事長はじめ、理事・監事・幹事の皆様には、本学会の事業に精力的に参画していただきまして、心から御礼申し上げます。

さて、本学会はお陰様をもちまして、平成25年4月に一般社団法人として設立してから3年目を迎えております。現在、日本は少子・超高齢社会を迎え人口減少時代に突入しております。2025年の20～45歳までの女性人口は、2000年のその約4分の3と試算されており、妊娠出産する年代がかなり減少します。合計特殊出生率は、1.57ショックから20年以上となりますが、現在も1.42と低迷しております。その一方で、45歳以上の超高齢出産も増えており、わが国の周産期看護や生涯を通じた女性の健康に関する課題は山積みであります。さらに、このような複雑な問題に対応できる能力をもつ母性看護の高度実践者や、母性看護学領域の教育研究者が不足しており、実践に根ざした問題解決型の研究成果や実践の質を向上につながる研究成果が求められております。したがって、一般社団法人日本母性看護学会の重要性は益々大きくなってきております。本学会が、母性看護学の基礎的研究や看護の質向上を目指した実践的研究を積み重ね、女性・母子並びにその家族の健

康を支援していくには、より一層の努力が必要であると考えます。そこで、本期は一般法人化して第二期目ですので、将来構想委員会を立ち上げ、本学会の将来計画を策定したいと思います。

昨年末に社員サービスの事務機能等を一元化して委託するよう準備し、4月から委託業者が変更となりました。それゆえ、本年度は事務機能の安定化と事業の推進を図り、本学会の目的、特に社会的提言機能を果たすために、本年度も引き続き「会員一人ひとりが連携して母性看護学の発展とそれによる社会貢献を行う場づくり」を積極的に行いたいと考えております。母性看護領域の実践家、教育研究者が連携協働することで、学会として更なる発展が達成されることと、若手実践家の実践支援、若手研究者の研究力の育成に力を入れていきます。具体的には以下の4点を行います。

1. 医療保健改革等につながる研究活動支援や国際的な連携
  2. WEBを活用した学術情報提供等の会員サービスの向上
  3. 学会認定の資格付与や高度実践者の支援と研究力育成の支援
  4. 一般市民向けの講演会などの社会貢献
- 今後とも、微力ながら本学会がますます発展していけるよう尽力致しますので、社員、理事、監事、幹事の皆様のお力添えをよろしく願い申し上げます。

敬具

# 第17回日本母性看護学会学術集会報告

学術集会長 高橋 眞理 (順天堂大学大学院医療看護学研究科 教授)

第17回日本母性看護学会学術集会は、メインテーマを「Women's Health Research —新たなジェネレーションを切り拓く」に、平成27年6月28日(日)、東京千代田区平河町のJA共済ビル カンファレンスホールおよびTKPガーデンシティ永田町において開催いたしました。

参加者は会員191名、非会員228名、学生32名の計451名であり、会場は朝から満員でした。また、演題発表は、口演12、ポスター 39の計51題が会員から発表されました。

では、プログラムの一部をご紹介します。スタートの順天堂大学医学部主任教授竹田省先生による特別講演は、先生の楽しいユーモアを交えながら「近未来の周産期医療」はどこに進んでいるのか、最新の知見を大変わかりやすくお話しいただきました。教育講演Ⅰ「EBPの構築に必要なシステマティックレビュー」では、SR(システマティックレビュー)のわが国も第一人者である大阪大学大学院教授・Japan Centre for Evidence Based Practiceセンター長の牧本清子先生に、ウイメンズヘルスの研究例をまじえながらご講演いただきました。教育講演Ⅱ(海外招聘講演)では、豪州モナッシュ大学のWomen's Health研究者ヘザー・ロウ先生に「Psychoeducational intervention to prevent postnatal depression — Health promotion for postpartum mental health —」の理論と実際について、WEB講演でお話しいただきました(メルボルン会場側に日本語逐次通訳付き)。また、シンポジウム「次世代のWomen's Health Care」では、最近の女性の健康課題の中でも特に注目されている、「女性のヘルスリテラシーと意思決定」(聖路加国際大学・中山和弘教授)、「性差からみた男と女のメンタルヘルス」(順天

堂大学越谷病院・鈴木利人教授)、「小さく生んで大きく育てることは良いか?」(早稲田大学理工学術院総合研究所・福岡秀興教授)、「女性アスリートと女性の生涯の健康」(国立スポーツセンター・能瀬さやか先生)をテーマに、各シンポジストの方に最新のお話をいただきました。さらに、Women's Health Researchに有用な研究方法を学びたい、スキルを高めたい参加者への新企画として、研究力アップセミナーを盛り込みました。事前申し込み制で、「システマティック・レビューの実際」、「信頼できるインターネット調査にむけて」、「リプロダクティブに関する女性の意思決定支援の評価」、「産褥早期母子関係の評価」の4セッションを設けましたが、各セッションとも大変好評でした。その他では、理事長講演、会長講演、交流セミナーⅠ、Ⅱなどもあり、1日の学術集会としては盛りだくさんのプログラムだったかもしれません。

また、今後、本学会は、逐次電子化への移行を図っていくため、まず今回の学会集会では、抄録集をインターネット上のみの公開とし、紙ベースではProgramの配布のみとしてみました。この点に関しての参加者の皆さんの反応は総じてよかったです。

当日は、会場でのPCトラブルや音声不備など、準備不足のトラブルが多々ありましたことをお詫びいたします。

今回のサブテーマ「ジェネレーション」には、1つは、周産期はもとより女性の生涯の健康の研究が、新たな「世代」の研究者によって切り拓かれること、また、2つ目は、遺伝子解析技術の進歩に代表されるよう、女性の生涯の健康は、今新しい「時代」を迎えているということ、この2つの意味合いを込めました。そして、

Women's Health Researchと新時代のスタート、この2つのモチーフの組み合わせから、今後の新たな知見が切り拓かれることを心より期待し、参加者の皆様には、学会当日は、〈今日は研究のことだけを考えた1日だったわ〉と思



高橋真理会長講演

えるような日になって欲しいという願いから、構成した学術集会でした。

最後に、講師の方々、ご参加くださいました皆様、そして準備をしてくれた企画委員、実行委員と事務局のメンバーに心より感謝いたします。



ヘザーロウ先生のWEB講演

## 研究力アップセミナー

### 「質的研究のシステマティックレビューとその動向」

関西国際大学 今野 理恵

近年、システマティックレビュー（以下、SR）への関心が世界的な高まりをみせています。SRとは、ある具体的な課題を検証した入手可能な全ての研究論文をシステマティックかつ網羅的に検索し、規定の研究方法に基づきベストなエビデンスを導き出すレビュー研究方法です。量的研究のSR（以下、量的SR）であっても、質的研究のSR（以下、質的SR）であっても、これらが活用される場面は同様で、臨床ガイドライン作成におけるエビデンス特定作業にSRは必須です。学位論文のレビュー部分にSRを取り入れる大学も年々増加していますし、ヘルスケア現場や専門団体からの、あるテーマについてのエビデンスはどうなっているのか？という疑問を受けて、SRが行われる場合があります。SRはEBP（根拠に基づいた実践）をとりまく教育、研究活動、実践の基盤であり、SRなしに真のEBPは実行不可能ともいえます。

こうしたSRへの注目一方で、質的SRの現状は混沌としていると言わざるを得ません。これは、一次研究を含む質的研究パラダイムその

ものが、常に変化と発展を続ける前提に立脚していることに由来します。質的SRにおける大きな争点の一つに、レビューに採用する質的研究の質を判定すべきか否かという、質的パラダイムの根幹に関わる問題があります。これまで、「研究の質」という考えは質的パラダイムにおいては、むしろ否定的に考えられてきた経緯があります。「正しい解釈」や、「唯一の正しい真実」は存在せず、いわゆる妥当性や信頼性を確保するための方法論上のルールは権威と直結し、「求められるべき真実・知識」の規制へと続くため、あえて排除してきた側面もあります。

しかし、世界的なEBPの影響により、質的パラダイム自身も変化を余儀なくされてきています。よりエビデンスとして活用できる研究を求める傾向が強まったと言えるでしょう。以前と比較して、専門ジャーナルでの質的研究論文の投稿・査読基準の明確化、厳格化の動きが広がっています。質的SRでは、例えば解釈学に基づいたメタエスノグラフィーの手法では質の判定は行わない前提であるにも関わらず、ジャーナ

ルの投稿規定でそれが求められるため、質の判定プロセスを採用した質的SR論文も少なくありません。

もう一つの争点は、複数の質的研究の結果を統合することは適切なのか？という、これも古くて未だ新しい問題です。質的SRで用いられるメタ統合については、様々なアプローチが提唱されています。例えば、コクラン共同の質的方法論グループでは解釈学（interpretivism）に基づいたメタエスノグラフィーの手法を、ジョアンナブリッグ研究所では実利主義（pragmatism）とフッサールの現象学（transcendental phenomenology）に基づいた、メタ集合（Aggregation）の手法を推奨しています。しかし、いかなる統合手法を用いたとしても、個々の質的研究論文はそれぞれがアートで完結しており、それを分解し統合するなど言語道断であるとの批判も続いています。

こうした質的SRをめぐる質の判定やメタ統合に関する議論は今後も続くことが予想されますが、貴重な一次研究エビデンスを実践に活用するためのパワフルなツールとして、質的SRとメタ統合が普及していくことが期待されます。

最後に、質的研究を取り巻く環境は、過去20年で大きく変化しました。最近のEBPムーブメントはパラダイム論争を飛び越え、すべての研究エビデンスは実践で活用されなければならないといった、ある意味アンブレラ的な視点を投げかけています。看護学・助産学は他の領域にさきがけ、社会学系の研究者たちとともに、いち早く質的SRの方法論を開発すべく研究を重ねてきました。研究対象の主観的世界に基づくエビデンスの重要性と可能性はこれらの学問領域、およびヘルスケア実践では広く理解されており、今後もその重要性はますます認識されていくことと思われます。

## 第18回日本母性看護学会 学術集会のご案内

助産師の活動はマタニティサイクルのみならず女性の一生へと裾野を広げ、教育においても妊娠・分娩・産褥期の内容のみならずウイメンズヘルスの視点へと視野を広げた内容が求められています。助産教育の基盤にある母性看護学教育においても、それらの教育展開には従来のアプローチを超えた教育戦略が必要となってきています。

そこで、第18回日本母性看護学会学術集会のテーマは、母性看護学教育の新たな展開をめざして「母性看護学教育再考～あらためて考えよう！どう教える？！母性看護学」と致しました。学術集会前日はプレコンgresとして助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢ認証申請に必要な研修のほか、母性看護学教育展開に役立つ実践的な研修プログラムを準備して

います。

九州沖縄地区は会員が少ないのですが、この学術集会をきっかけに九州地区の会員数が増えることを願い、福岡県久留米市石橋文化ホールで開催させていただきます。

久留米市は福岡空港から南へ40キロ、九州新幹線が開通して新幹線でおこし頂くのも便利です。焼き鳥や久留米ラーメンなどB級グルメもお楽しみいただけます。“くるめでグルメ”、“ほとめき(おもてなし)の街「久留米」”を合言葉に、皆様をお待ちしております。

(第18回日本母性看護学会学術集会長 松原まなみ)



# 日本母性看護学会への期待

## 実践研究の促進に向けて

大阪府立大学 地域保健学域 看護学類 山田 加奈子

私は、日本母性看護学会の戦略的プロジェクトとして、成田伸先生を中心とした多施設共同による「妊娠糖尿病既往女性の産後継続支援の介入研究」に参加させていただいています。この研究は最終的に、妊娠糖尿病既往女性への妊娠糖尿病の知識や技術を獲得した助産師が主導する産後の継続支援により、糖尿病に関わるフォローアップ率を改善し、妊娠糖尿病既往女性の将来の糖尿病発症を予防することを目標に行っています。

助産師への妊娠糖尿病を含め糖尿病発症予防について知識を強化する育成プログラムを作成し、研修会は栃木、大阪からはじまり、今後は富山、埼玉、福岡でも開催予定です。各地の研修会には多くの助産師や看護師、母性看護専門看護師の方々にご参加をいただき、受講者の真剣に学ぶ様子から、この研修内容が妊娠糖尿病既往女性への産後継続支援を提供したいという助産師等の学習ニーズに合致していると感じています。現在は、育成プログラムを受講した助産師を中心として、各施設で妊娠糖尿病支援

チームを作り、長期的な産後フォローアップの多施設共同研究を開始したところです。今後もさらなる看護の実践的研究を積み重ねて実証し、産後フォローアップシステムの構築につなげていきたいと考えています。

また、若手教員である私にとって、このたびの戦略的プロジェクトへの参加は、他大学の先生方から研究方法や研修会の進め方、学会発表の指導など多くの学びを得る機会でもありました。プロジェクトを通じて臨床看護職の方々と関わる機会も多く、今の臨床現場の現状や臨床看護職のニーズを知ることができ、それを研究につなげるというやりがいも感じることができました。

本学会にはこれからも、研究助成金の充実や戦略的プロジェクトなど研究に参加できる機会を整えていただきたいとともに、研究に関する指導や意見をいただける機会を頂戴できれば、若手教員や看護職もより積極的に研究に取り組めると考えます。

## 母性看護専門看護師の支援

山梨大学医学部附属病院 母性看護専門看護師 竹田 礼子

専門看護師は、複雑で困難な看護問題を持つ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供するための、特定の専門看護分野の知識・技術を深めた専門看護師を社会に送り出すことにより、保健医療福祉の発展に貢献し併せて看護学の向上をはかることを目的としています。母性分野の特徴は、女性と母子に対する専門看護を行うことであり、主たる役割は、周産期母子援助、女性の健康への援助に分けられます。2015年9月現在、全国で49名の母性看護専門看護師が活躍しており、母性看護分

野の教育は18の大学院行われています。

専門看護師には6つの役割があります。①個人、家族及び集団に対して卓越した看護を実践する（実践）、②看護者を含むケア提供者に対しコンサルテーションを行う（相談）、③必要なケアが円滑に行われるために、保健医療福祉に携わる人々との間のコーディネーションを行う（調整）、④個人、家族及び集団の権利を守るために、倫理的問題や葛藤の解決をはかる（倫理調整）、⑤看護者に対しケアを向上させるため教育的役割を果たす（教育）、⑥専門知識及

び技術の向上並びに開発をはかるために実践の場における研究活動を行う（研究）。

日々の看護実践の中で、複雑で困難なケースへの介入をおこなっていますが、専門看護師に求められる6つの機能を発揮するために奮闘しています。実践事例の積み重ねでは、大学院の先生方と事例の振り返りを行いスーパーバイズを受ける機会を設けています。相談や調整、倫理調整においては基本的なコミュニケーション技術や様々な理論の活用のための文献理解などを深めています。日本母性看護学会で主催されるセミナー等は最新の知識を得ることができるため毎年学会に参加しています。教育や研究においては、臨床での課題は山積みですが、研究発表まで発展させる事や複雑な分析方法につい

ては大学院の先生方と協働で行い支援をしていただいています。母性看護専門看護師が実践や研究の成果を発表できる機会として日本母性看護学会の存在はとても重要です。専門看護師養成の教育機関の先生方が多いため、様々な機会に交流集会や意見交換の場を設けていただき専門看護師の育成と活動の支援を行っていただいています。また、CTG判読スペシャリスト育成や戦略的プロジェクトにも加わらせて頂くことで専門看護師としての活動の場を広げる機会にもなっています。今後も日本母性看護学会と母性看護専門看護師が共同して研究発表を行っていくことや、プロトコルの作成など行っていけることを期待します。

## 学会員が学べる学術集会

佐賀県医療センター好生館 助産師 俵 由里子

私は佐賀県医療センター好生館の産婦人科病棟に勤務する助産師です。

第16回と第17回の学会に参加させていただきました。

第16回は聖マリア学院大学院、母性CNSコースの学生としての参加でした。学会内ではCNSの活動発表があり、会場でCNSの先輩方と直接お話をする機会も持つことができ、具体的な活動報告を聞き刺激を受け、今後CNSとして自分が取り組みたい内容や、サブスペシャリティーとすることを明確にする機会となりました。

病院勤務の助産師として参加した第17回の学会では、「十代妊婦の意思決定にかかわる体験」についてポスター発表いたしました。

大学院在学中は、患者さんと関わりの中で、学びを活かしたいと意気込んでいたのですが、臨床に戻ると、立ち止まって看護を振り返る時間を持たずに、CNSを目指している自分を見失っていました。そのような中で学会に参加し、講演や発表に刺激を受け、自分自身の活動意欲

を高める機会となりました。現在はCNS資格取得に向け、自己研鑽しています。

私は臨床の助産師は、日々関わる患者の声や、患者から得たものから看護を問い、考え続ける義務があると考えています。そのためには、臨床から患者の声を届ける必要があります。その手段として研究を行うことと、発表する場が必要となってきます。しかし臨床で働く助産師や看護師は、研究や学会への参加に意欲をもっても、目の前の患者に向き合うことに必死で、研究をする時間をもてないのも実状です。

母性看護学会においては、臨床の助産師、看護師が発表できる場として、研究発表という形ではなくとも症例報告や、活動報告をすることができ、気軽に参加できる学会としてより多くの人に広く周知してもらった上で、学会内では発表を受けて様々な立場の参加者が看護について語りあい、母性看護に関わる仲間としてお互いが刺激を受け高めあえるような場所であり続けていただきたいと思います。

# 事務局からのお知らせ

## 1. 日本母性看護学会会員動向

日本母性看護学会は1996年6月に設立され、当時の会員数は約200名でした。その後、徐々に会員数は増加し、2015年10月現在752名を数えるまでになりました。特にこの数年は年間70-90名ずつ急速に増加しています。これらの背景には、看護系大学の急激な増加に伴い、教育・研究者、大学院生の入会が増えたことや、2009年より開始したCTGセミナー（CTG判読スペシャリストの育成）や若手並びに臨床で働く研究者への支援として行っている研究助成制度、母性看護専門看護師への活動支援などの会員サービスの充実があると思われます。

しかし、昨年から今年にかけては会員数の増加がやや鈍化しています。また、残念なことに、退会者も年間40-70名となっており、そのうち会費を2年以上未納で退会処理になってしまう（定款第11条による）会員も年間20-40名存在します。これらは比較的会員歴が短い会員が多く、学術集会の発表やセミナー参加のために入会したものの、短期間で退会になっていると考えられ

ます。学会収入のほとんどは会員からの会費であることから、会費納入率を向上させるとともに、会員にとって継続して学会活動をしたいと思える魅力ある学会となるよう、会員サービスのさらなる充実を図っていきたいと思います。

## 2. 平成28-29年度の理事の分掌

平成27年2月に役員選挙を実施しました。平成27-28年度の理事の分掌をお知らせします。

分 掌	担当理事
理事長	森 恵美
副理事長	高橋 眞理
庶 務	高橋 眞理 大月恵理子 坂上 明子
会 計	鈴木 幸子 佐々木綾子
編 集	吉澤豊予子 石井 邦子
広 報	遠藤 俊子 松原まなみ
研究促進	大平 光子 工藤 美子
学術・教育支援	町浦美智子 山本あい子
戦略的プロジェクト	成田 伸 齋藤いずみ
CTG判読スペシャリスト育成	島袋 香子
監 事	前原 澄子 新道 幸恵

## 3. 会員の皆様へのお願い

### ○平成27年度会費の支払い

本学会は皆様の会費で運営されております。平成27年度会費未納の方は、本ニュースレターに同封している郵便振り込み用紙（青色払込取扱票）を用いるか、あるいは下記の口座番号へ会費の納入をお願いいたします。

年会費：8,000円

#### 1) 郵便振込の場合（青色振込取扱票）

口座番号：00120-8-386309 加入者名：一般社団法人日本母性看護学会

#### 2) 銀行振込の場合

ゆうちょ銀行 ○一九店 当座 0386309

### ○会員情報管理システム（SOLTI）への情報更新のお願い

新年度を迎えるにあたり、ご連絡先・ご所属先等が変更される会員の皆様は、本システムより情報更新をお願いいたします。

学会公式ホームページ【会員情報照会・更新】

会員ID（会員番号）とパスワードを入力の上、ログインしてください。

## 4. 研究促進

研究促進では、学会員の研究活動の促進を目的に活動しています。会員が申請できる助成金等の情報提供をホームページ上に掲載しております。是非ご活用ください。さらに、若手研究者や臨床で働く方の研究活動を支援する目的で、平成28年度研究助成を募集します。応募期間は平成28年1月から2月末（必着）までです。満3年以上の会員歴のある方は研究代表者としてご応募できます。詳しくは、同封の募集要項をお読みいただき、是非ご応募いただきますようお願い致します。

## 5. 戦略的プロジェクト

戦略的プロジェクトは、①看護系学会等社会保険連合（看保連）の課題である診療報酬改定に向けての看護技術に関わる提案書作成への参加、②助産師団体連絡会等への参加、③母性看護専門看護師（CNS）の活動支援を主な活動としています。平成25年度からは特に、妊娠糖尿病（GDM）と妊娠高血圧症候群（PIH）に対する看護介入のエビデンスづくりを主要な活動としてきました。PIHは、妊娠期・産褥期におけるPIH重症化予防に関して、母性看護CNS専門看護師のいる全施設に対する調査を実施中です。GDMは、先駆的に活動する施設および専門家のGDM既往女性への産後のケアについての聞き取り調査、周産期医療センターにおけるGDM支援状況に関する全国調査を実施し、その成果を学会発表しています。さらにこの成果を踏まえて、GDM支援の看護職育成の研修会を開催しています。平成28年度は診療報酬に関わる看護技術提案の年度であるため、GDMについてはその申請をめざし、これまでの成果を取りまとめ準備中です。戦略的プロジェクトの動きについて、会員の皆様が関心を持っていただけだと思います。

## 6. 第18回日本母性看護学会学術集会

日時：平成28年6月18日（土）9：30～17：00  
場所：石橋文化ホール（久留米市野中町1015）  
テーマ：“母性看護学教育再考”～あらためて考えよう！ どう教える?! 母性看護学～  
演題登録期間：2016年1月4日（月）～1月31日（日）  
プレコングレス：2016年6月17日（金）13：00～18：00  
母性看護学教育実践力アップセミナー  
助産実践能力習熟段階レベルⅢ認証申請必須研修セミナーなど  
詳細は学術集会HPを参照してください。



### 編集後記

街中にジングルベルの響く候に、やっとお届けできました。

理事長挨拶にもあります学会の今期の課題にチャレンジする活動を、会員と行っていくための案内をいくつか本号でも紹介しております。【学会員同士のネットワーク、共同研究など活発化しましょう。】

ニュースレターを手にとって頂けたら、WEBの充実としてのHPにもアクセスを試みてください。「日本母性看護学会」と検索したら入れます！

発行人：森 恵美  
発行日：2015年12月1日  
広報担当：遠藤俊子、松原まなみ、常田裕子  
発行：一般社団法人日本母性看護学会  
〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-1  
第2ユニオンビル4階 株式会社ガリレオ  
学会業務情報化センター内  
一般社団法人日本母性看護学会事務局  
Tel：03-5981-9824 Fax：03-5981-9852  
E-mail：go31jsmn-mng@ml.gakkai.ne.jp